

ここに二人の仏道修行者がいるとします。二人とも同じように坐禅修行を行っています。

一人は自分自身が悟りを開いて、僧侶としての真実の安らぎを得るために修行しています。この修行者は普段から、周りの人々のことなど眼中にない様子で、ひたすら自分のためだけの坐禅修行に打ち込んでいます。その姿は、眉間にしわを寄せ、大変苦しそうです。

もう一人の修行者は、もちろん当初は自分自身の悟りを目的としていましたが、今では修行そのものが安らぎとなり、坐禅に親しんでいるようです。その上、自分のための修行というよりも、周りの総ての人々のために修行をしているかのようです。自分が修行を行うことで得た功德を周りの人々にめぐらし、与えることを常に考えているのです。その姿は安らかで、すがすがしいものでした。この修行者を周りの人々は慈しみのころを持った、慈悲の仏様と呼んで、尊敬するようになりました。

前者の修行者は、自分自身の悟りを求め苦しい修行を続けています。それに対し後者の修行者は、自分の修行の功德という大きな乗り物に人々を乗せて安らぎをもたらすという意味の大乗の修行を行っています。慈悲の心が重んじられた大乘仏教の特徴をよく言い表した呼び方です。私たち曹洞宗は、この大乘仏教の教えを受け継いでいます。

お経の功德や修行の功德を周りの人々にめぐらすことを、回し向かわせると書いて、『回向』といいます。曹洞宗では、お経を読んだ後には必ず回向のための言葉をお唱えします。この回向の代表的なものに普回向があります。

「願わくは此の功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に仏道を成ぜんことを」

自分の修行の功德を自分自身だけでなく、総ての人々にめぐらし分け与えることで、安らかで平和な世界が実現できますように、と祈る言葉です。

価値観の多様化した現代社会では、社会全体が平和で安定していなければ個人の安らぎも得ることが出来なくなっています。総ての人々がこの回向のころ、すなわち慈悲のころを起こして、みんなが平和で安心して暮らせる社会をつくり上げたいものです。